



第八卷第二十號

香や

奢侈を戒む

下田次郎

今の人間は、一體奢りが過ぎたり。殊に婦人の奢り方、めかし方の法外なるは、甚だ苦々しき事なり。この借金と貧乏にて、首も廻らぬ我が國の今日に於て、何を頼み、何を當てにして、婦人は、斯くも、奢りめかす事をすぞ。

廣告を見て知るべし。婦人の奢り道具めかし道具の流行すること、前古未聞にあらずや。その大不景氣の世の中に、賣服屋、寶石商等、婦人を相手の店屋だけは、益々大繁昌にて、賣り出しなどには、巡查を頼んで、來客の混雑を制するの有様、呆れて物がいへず、成る程日本が貧乏する筈なり。あの奢る心掛けと熱心にて婦人が、穢いて呉れたらばどれほど、親と夫の息がつけ、家の遣り繰りも樂になり、延ては國の富を増すこととなるか、知れず。情なく、厭ふべきは、この奢り屋の婦人なり。

婦人には、人の物をたゞで遣ふの特權を有するが如く心得居るもの少からず。親や夫が、心配して、骨折りて、やう／＼儲け出したる血の出るやうな金銭をば、遣ひ掛り、引き受けたりと、妻や娘は、やれ着物の帯の、襟り巻きの、リボンのと、遣ひ果して、五分も残らず。残るは借金ばかりなり、男子が瘡せるも無理ならず有る金を使ふは、まだしも夫に内證にて、借金の前借りをし、めかした擧げ句、高利貸に責め付けられ、執達吏に踏か込まれて、暗闇の耻が、明るみに出て、天晴れ美事な耻さらし、随分無茶なめかし方なり。奢る女を一人有することは、一家破滅の基。大概の身上は、二人は入らず、一人で澤山なり。往來でめかした女を見る度に、またこゝに例のが一人居るわいと、思はぬことなし。得意満面のその側には、親泣せ、夫泣せのその泣き顔が、ありくと見えるやうなり。